

令和元年6月13日現在

機関番号：12501

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K15953

研究課題名（和文）生活障害のケアの体系化と認知症高齢者の病みの軌跡の解明

研究課題名（英文）daily life disabilities in Alzheimer type dementia and elucidation of the trajectory

研究代表者

諏訪 さゆり（SUWA, SAYURI）

千葉大学・大学院看護学研究科・教授

研究者番号：30262182

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：認知症高齢者は認知機能障害から影響を受ける。認知機能障害によって、食事や排泄、入浴などの日常生活行為の遂行障害が出現する。それを生活障害と命名した。まず、アルツハイマー型認知症の高齢者の観察とケアスタッフへのインタビューから、認知症高齢者の自律と自立を支援する生活障害のケアを体系化した。それらのケアによって認知症高齢者の病みの軌跡や認知症高齢者の行動心理症状が改善されることを、認知症高齢者の事例から得られた詳細なデータを分析することで明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アルツハイマー型認知症の高齢者は、認知症の進行とともに心身機能が低下し、終末期には経口摂取が不可能になり寝たきりになって死亡すると信じられてきた。しかし、事例の詳細なデータから、適切なケアを提供することによって最期まで経口摂取やトイレでの排泄が可能になることなどが明らかになり、最期まで尊厳ある生活を送ることのできる可能性を見出した。アルツハイマー型認知症の高齢者のイメージを一新する知見を超高齢社会に提示したと言える。

研究成果の概要（英文）：Dementia Older people are affected by cognitive impairment. Cognitive dysfunction causes the failure to perform daily life activities such as eating, excretion, and bathing. We named it daily life disabilities. First, from the observation of dementia people and interviews with the care staff, we systematized the care of daily life disabilities to support the autonomy and independence of the older with dementia. By analyzing the detailed data obtained from the cases of elderly people with dementia, it was clarified that those cares improve the trajectory of Alzheimer type of dementia in older people with dementia and behavioral and psychological symptoms of people with Alzheimer type of dementia.

研究分野：高齢者看護

キーワード：認知症 高齢者 生活障害 病みの軌跡

1. 研究開始当初の背景

厚生労働省は平成 27 年に策定した認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）において、認知症の人の意思が尊重され、できる限り住みなれた地域で自分らしく暮らし続けることができる社会の実現を目指すことを打ち出した。そのためには生活の場において、認知症高齢者が ADL や IADL 等の日常生活行為を可能な限り自律・自立的に遂行できることが重要になる。しかし認知症高齢者においては、認知障害の進行によって日常生活行為の遂行が困難になる生活障害が出現する。自宅や住み慣れた地域での生活の継続を目指すには、生活障害のケアを中心として認知症ケアの体系化・標準化がなされ、しかも家族介護者や地域住民が実践できることが不可欠になる。

研究代表者らはこれまでに、食事、入浴、排泄等 27 の日常生活行為について生活障害の具体像とケア実践の現状を抽出した（諏訪ら, 2013）。しかし、生活障害のケアによって個々の日常生活行為の遂行状況が一時点で向上したとしても、生活障害や認知障害の進行状況、意思の言語的表出、精神症状・行動障害の予防・緩和状況、有害事象・合併症の発症状況を含めた認知症高齢者の病みの軌跡を明らかにするには至っていない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、生活障害のケアを体系化し、そのケアによって認知症高齢者がたどる病みの軌跡を解明することである。

そのために、(1)生活障害のケアに先駆的に取り組む介護施設のケア専門職によるかかわりや環境の工夫を認知症のステージおよび原因疾患別に体系化する。そして(2)体系化された生活障害のケアによって認知症高齢者の日常生活行為の遂行状況や精神症状・行動障害の発症・緩和状況等の経過を前向き・後ろ向き調査によって明らかにする、こととした。

3. 研究の方法

(1)デイサービス、グループホーム、特別養護老人ホーム、計 6 施設を利用する、生活障害を有している合計認知症高齢者 15 名をケアしている看護・介護スタッフ 20 名のケア場면을約 6 か月間参加観察し、また各々の認知症高齢者の生活障害とケア、さらに認知症高齢者の心身機能の変化について各施設内でグループインタビューを実施した。その後、FAST の重症度ごとに認知症高齢者の生活障害とそのケアを質的帰納的に分析した。さらに、食事、入浴、排泄を中心に日常生活行為を数段階から成る遂行プロセスと捉え、それぞれの段階における特徴的な生活障害と、その生活障害における自律と自立を可能な限り実現するケアをパッケージ化することで、生活障害とケアのリストを作成した。その後、そのケアのリストは、過去の文献研究を踏まえて生活障害とケアの内容を加筆した。そのケアのリストを介護施設のスタッフに教育し、認知症高齢者のケア実践において活用してもらい、認知機能障害（改訂版長谷川式認知症スケールにより測定）、認知症高齢者の生活障害の出現状況と日常生活行為の遂行状況、認知症の行動心理症状（NPI により測定）、身体疾患の発症・増悪を観察した。

(2)独居の高齢女性がアルツハイマー型認知症を発症してから記述していた日記について、4 年分の記述内容を分析データとして、自宅での日常生活の変化と改訂版認知機能障害の経過、障害老人の日常生活自立度、認知症高齢者の日常生活自立度の変化との関連を検討した。

4. 研究成果

(1)生活障害のケアのリスト（簡略化したケアのリストを表1に示す）

以下に食事の生活障害に関するケアのリストについて述べる。ケアのリストは大きく1.食事を始める前に（身体の状態チェックリスト、基本的な環境や声掛けのチェックリスト）と2.食事中の支援（食事の開始 食事の継続 食事の終了 各時期での生活障害の具体・考えられる要因・支援の具体例が記載された表）の2部構成とした。ケアのリストの使い方について、「ガイドラインのように複数の対象者に対して用いるのではなく、1人の対象者に対し1つのケアのリストを用いる」とした。まず【1.食事を始める前に】内の【身体の状態チェックリスト】の目的を「対象者の身体状況を明確にし、対象者に生じている食行動の障害が身体状態の異変によるものではないか確認するもの」とし、誰が読んでも分かりやすいように修正した。次に【2.食事中の支援】では、「食卓につくことができない」「途中から手づかみで食べる」等の生活障害の具体を目次のようにまとめ、ケアのリストの中でそれぞれについての詳細が記載された部分を簡単に探し出せるような仕組みを作った。インタビューや観察から得られた情報から、【主体性を引き出す】【配膳・声掛けの工夫】【空間・食材の工夫】などのケアの具体例に関する項目を設定し、具体的なケアの意味づけができるようにした。さらに、支援の具体例が記載された項目の右側に【気付いたこと・やってみたこと】という自由に記載できる欄を作成した。

これらのケアを提供されたデイサービス、グループホーム、特別養護老人ホームを利用する認知症高齢者は、いずれも認知機能の低下や日常生活自立度の低下は緩やかであり、認知症の行動心理症状の発症・増悪も認められなかった。

表1 食事の生活障害とケアのリスト（簡略バージョン）

食事区分	生活障害（一部抜粋）	ケア（一部抜粋）
食事開始	食卓につくことができない	●静かな食事環境
	座ったまま食べ始めない	●慣れ親しんだ食器・料理を用意 ●最初の一口を介助し食べ物の知覚を促す
	食べ物に触れるだけで、食べない	●食材を工夫し食べ物だと知覚可能にする
食事継続	食べることを中断する	●好物、彩のよい盛付けで注意力を選択・維持 ●視線上に食べ物を置く
	食事の途中で立ち去る	●近くに人のいないテーブルで食事 ●音やスタッフの動きを抑える
食事終了	いつまでも食べ物を食器からすくい取ろうとする	●歯磨きなど、次の行為に注意を導く ●模様のない皿に変更
	まだ食べていないと言う	●次の食事時間を伝える ●軽食を用意 ●食後、食器をすくには片づけない

●生活障害を観察し、適切にケアすることで、リスク発生に早期対応

(2)アルツハイマー型認知症を発症した独居の高齢女性 A 氏の日記の記述内容（X 年はアルツハイマー型認知症の診断された年）

認知症の経過としては、X 年 4 月に物忘れが多く見られたため病院を受診したところ、アルツハイマー型認知症と診断。長谷川式認知症スケール（資料 1）23 点（軽度）、障害高齢者の日常生活自立度（資料 2）J2、認知症高齢者の日常生活自立度（資料 3） a、要介護 1、主な症状：

記憶障害、見当識障害、物取られ妄想、失禁と排尿障害、誤薬があった。誤薬により服薬は中止となった。お金に対して執着が出てきた。利用サービスは訪問介護、デイサービス、配食サービス、福祉用具（トイレ）である。2年後のX+2年には、長谷川式スケール19点、障害高齢者の日常生活自立度J1～A2、認知症高齢者の日常生活自立度 a～ b、要介護2、主な症状…記憶障害、見当識障害、物取られ妄想、失禁と排尿障害、徘徊、うつや抑うつ、異食、着衣失行。利用サービスは訪問介護、デイサービス、福祉用具(トイレ、ベッド)である。

期X+5年1月～10月（8月の約1か月間と11、12月は記載なし）

はじめ、日記は日付のみの記載であったが4月頃から分刻みの表記になった。日記は同じ日付や同じ時間が書かれていることや、「その時々々にノートして少しでも分かるようにする」と記述され、1日複数回書いていたことや事あるごとにその都度書いていた。「起きる前に書いている」と書かれており、起床後すぐ布団の中でも書いていたことが記された。字の乱れが見られるようになったが、整っていることもあった。また、新しいノートになると字が整う傾向が見られた。8月下旬頃には「これはこれは…」と繰り返され「何を書いているかわからない」と続けて記されていた。また別の日には「ははは…いいいい…」と文字が羅列されていた。

生きることについて

一人で生活していることに対して「一人寂しい」「あわれ」といった孤独を感じている表現が多く見られ、「有意義な暮らしがしたい」と希望を綴っていた。

認知症や自身の老いについて

物忘れの自覚があり「今日の昼のことはもう忘れている」、A氏はデイケアから自宅に帰り少しした後に日記を書いていたと時刻から明らかになったが、デイケアで「色々何をしたのだろう、分かっているようで書けない」と書かれ、夜には昼のことを忘れていた。日記内で内容が重複しているものも複数箇所見られた。認知症や自身の老いについて様々な表現が使われていた。一人で暮らすことに困難を感じながらも、「自分のことは自分でする」というように自立して生活していきたい意向を述べていた。通帳を盗られてしまったという記述もあった。

他者について

他者への思いとして、次男を一番頼り、感謝している気持ちが多く見られた。また、「自分のおろかさを他人に見せない」「軽視される」という表現からは他者に毅然と振舞おうとしていたことや他者の視線を意識している様子が表現されていた。孫の結婚が決まったが、「自分は高齢でぼんやりもしているので式には呼ばれないだろう」と考え、「取り残されてしまう」と感じていた。

専門職者について

専門職者に対する思いとしては、主にヘルパーに対してである。A氏には、以前から担当しているヘルパーのC氏がおり、「Cさんがあれこれしてくれる、ただただ有難い事です」など、信頼し感謝していた。C氏の他に交代で来ていた複数のヘルパーに対しては、「よく働いてくれる」など記述していたが、「私としては頼んでないので迷惑だが仕方がない。金がいることだからCさんだけで十分である」と、C氏一人で十分だと考えていたことが示されていた。

期(2)X+6年2月中旬～12月（ただし、1月～2月中旬の日記なし）

生きることについて

この時期も、一人で生活していることに対して「一人寂しい」「あわれ」といった孤独を感じている表現が多く記述されていた。

認知症や自身の老いについて

認知症により物忘れが増える自身に対して、「自分でも自分がわからなくなった、これがぼけと言うのか」と表現していた。時期に合った洋服を着ることが困難になったことやデイケアに行く日を間違えてしまうようになったことや自分の年齢が分からなくなっていることによる困難が述べられた。「提出用の書類のことで探して骨折ったので、提出せねばならぬ大事なものは一つにまとめて『はこ』に入れておく事」と書いてあり、忘れてしまうことに対して自分なりの対策を考え綴っていた。

日記に関しては、「今書いているけど字は一つもわからん」「今思ったことですが鉛筆のうつりが悪いので取りかえていたら書くことを忘れてしまった」とあり、字が分からなくなっていることや書こうとしていたことを忘れてしまったことが表現された。

他者について

他者との関わりについては、「お嫁さんに迷惑をかけるけど申し訳ない。家を守ってくれるお嫁さん、すみません、よろしくお願い致します。」と長男のお嫁さんを頼り、感謝する気持ちが綴られていた。また、「人からよくしてもらうのは自分が先に良くしなければならぬ 当たり前のこと」と書かれていた。

専門職者について

専門職者に対しては、物が取られたと思った「誰が取ったか大体わかる、今からうちは C さんだけに家政してもらって他の人には頼まないこと」と書かれてあり、物を取るのは C 氏以外のヘルパーだと考えるようになった。物が取られた後の別の日には、「家政の人が来てくれ掃除をしてくれる、楽しく話をして帰る」とも書かれていた。C 氏に対しては、「私はこんななのに C さんは人の手助けをしてくれ私とは大きな違いである」とあった。

10月に、長谷川式スケール 10点、障害高齢者の日常生活自立度 J2、認知症高齢者の日常生活自立度 a、要介護 2 と評価された。

(期 略)

期 X+8 年 1 月～8 月 (日記終了)

生きることについて

日記の最後の 1 冊 (6 月中旬～8 月の日記終了まで) はページが切り取られている部分があり、日付が前後している時期もあった。元旦には「自分に負けず、頑張る」というように、1 年の目標を立てていた。人生について考えることがあり、「人生とは人生とはなんと難しく大変なものでしょう」と人生の困難さを感じていた。物忘れの悪化について自覚が綴られていた。

認知症や自身の老いについて

「四月七日日曜日である(七時四十五分)日にちがわからなくなっている、今は四月七日曜日…」とあり、日付のみ繰り返し書かれていた。「今日から『小せつを』読んでみませ(悲しいお茶)今日はわからぬ事ばかり」と書かれ、『小せつ』に矢印を差し「これはなんですか、言葉がわからない」と追記されていた。また、A 氏が書いた文章の後に続けて「(これはだれが書いたのでしょうか名前を書いて下さい)」と書かれており、自分が書いたことがわからなくなっていることを述べていた。また、「自分のことを書きたくないばかばかしい」と日記を書くことを拒む内容もこの時期には書いてあった。

他者について

「こまる時は自分がしっかりして自分を反省して自分をたより子供をたよること、子供や外の

人にたすけてもらうこと」「別の自分が自分をまもりしっかりやれ、つまらん自分にまけるな」と家族や他の人を頼ることや自分を大切にすることが書かれてあった。

専門職者について

1月下旬～3月に外に干している洗濯物を取られることがあると記されていた。しかし、5月頃から、お世話になっているヘルパー一人ひとりの名前、特徴（年齢、地名）を書いた後、「加勢して下さる人をよく知りって感謝してかせいしていただく...まず感謝そこに綺麗な言葉がうまれる。まず感謝、感謝すればしぜんに礼儀もうまれる。本当に感謝すれば字もきれいになる」「毎日変わり番後に加勢して下さる方が一件一件行ってお手つだいをしている...こんなよいところを持っている其の人達のよい所を教えてもらう事、よくよくお話を聞いてその良いこと(ところ)を教えてもらう...加勢しておくれる方に学ばなければならない」と綴られていた。また、Aさんが自ら「ヘルパーに気安く話し過ぎてしまう」とも書かれてあり、自分の物を取る人から家事を手伝ってくれるので感謝すべき人であるとヘルパーの捉え方に変化が見られた。7月に、障害高齢者の日常生活自立度 A1、認知症高齢者の日常生活自立度 a と評価された。

以上より、独居のアルツハイマー型認知症の高齢女性の自宅での日常生活の経過と認知機能障害や日常生活自立度の経過が具体的に明らかになった。時間が経過しても、A氏は自身を内省し、自律的な生活を送ることができたと言える。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計1件)

Suwa S, Otani S, Tsujimura M, Nogawa K, Shiya Y. The diary of a nonagenarian centenarian woman with dementia: Memory loss, life changes, and community care in Japan. *Int J Nurs Pract.* 2018;24(S1):e12655. <https://doi.org/10.1111/ijn.12655> 査読有
[学会発表] (計1件)

辻村真由子, 諏訪さゆり, 小館尚文: 認知症者の生活障害へのケア - アイルランドにおけるヒヤリング調査 - . 日本認知症ケア学会 . 2018年 .

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名: 辻村 真由子

ローマ字氏名: Tsujimura Mayuko

所属研究機関名: 千葉大学

部局名: 大学院看護学研究科

職名: 准教授

研究者番号(8桁): 30514252

研究分担者氏名: 池崎 澄江

ローマ字氏名: Ikezaki Sumie

所属研究機関名: 千葉大学

部局名: 大学院看護学研究科

職名: 准教授

研究者番号(8桁): 60445202

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。